

現代日本を代表する思想家の一人 鶴見俊輔氏は、両親を反面教師として人格形成した。父祐輔は一高→東京帝大→高級官僚→政治家という「秀才コース」を歩いた。戦前は心情の自由主義者と目されていたが、戦時体制に呼応して国家に同調、戦争協力者となった。早くも少年の頃から、日中戦争を侵略と判断していた鶴見氏は、父に不信感を抱いた。一九四二年、米国から帰国した鶴見氏は、知識人の転向を目の当りに見て、変節が父だけでないことを知り愕然とする。そのことが戦後の転向研究の動機となった。父から学んだこと。「一番病」は真つ平。

一方、母愛子は東京市長・後藤新平の娘で、過剰な愛情からと思うが、俊輔を異常なほどきびしくしつけた。母の折檻と光る目に脅える毎日が少

年の心を蝕み、非行、不登校となる。この少年時代の不幸な体験が、鶴見氏に「私は悪人」「私は不良少年」の意識を植え付ける。母から学んだもの。過剰な愛情は真つ平、監視社会の恐怖。

戦後の鶴見氏は、「一番病」秀才たちとはちがった学問と思想の分野を開拓し、卓越した仕事を成し遂げた。本書の主眼は、その足跡を時代との関連で一つひとつ丁寧に追うことにある。

氏の仕事は①思想の科学研究会や雑誌『思想の科学』を通じた思想運動、啓蒙活動、共同研究②ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）や脱走兵援助などの市民運動、反戦平和運動、に大別される。

①と②はいずれも鶴見氏が戦争から学んだもので、根は一つといえよ

う。思想の科学研究会創設の目的は、言語と論理の合理性構築にあった。それは戦争中の「八紘一宇」や「皇国日本」などの、言葉の呪術性、神がかり論理の克服で、鶴見氏が米国で学んだ記号論や論理実証主義の応用である。②は反戦の立場であったにもかかわらず、それを行動に移せなかつた戦争中の自分の弱さへの反省が動機にある。強いて分ければ、①は戦争体験の思想化であり、②は戦争体験の運動化である。氏にとつて、これが本書のタイトルでもある「戦争が遺したもの」にほかならない。

この本は鶴見氏の故事来歴を、気鋭の社会学者・上野千鶴子、小熊英二の両氏が聞き書きしたもので、私をはじめ知るエピソードも少なくない。たとえば、戦争末期、海軍に

属し、ジャワにいた時、日本に帰らず、現地の女と暮らしてもいいと思つた、ということなど。

上野氏は「あとがき」で、「聞き手としての小熊さんは、わたしの目からは、あつげにとられるほど無遠慮な聞き手だったし、小熊さんの目からは、わたしはあまりに容赦のない追及者だったことだろう」と書いているが、そのために、鶴見氏の本音が洩れるところ、鶴見氏をたじたとさせるところが何回もあった。その一つが、鶴見氏がかかわつた「女性のためのアジア平和国民基金」で、氏はそれを「誤算だった」と認めている。

鶴見氏は「誤解する権利」を縦横に駆使する達人で、そこに鶴見氏の魅力もあるのだが、反面、評価の基準が放縦に流れることがある。その点に私は不満で、自著で異議をはざんだことがある。この本でも「あれはいい人間だ」「あれは面白い人間だ」ということで、その人の政治思想や歴史認識がきびしく追及されることがない。その一例が『思想の科学』から育つた作家・上坂冬子氏に対する評価で、上坂氏の浅薄でデータラメな歴史認識は不問に付される。

鶴見氏と親しかった思想家・藤田省三は晩年、鶴見氏とその評価基準を「面白主義」と名付け、峻烈に批判した。上野・小熊両氏が「容赦のない追及」をするのはそのあたりで、鶴見氏の多元主義の盲点、陥穽といえよう。

聞き手に人を得た好著。

きんようぶんか

# 鶴見俊輔とその時代

評者= 新藤謙

しんどう けん  
批評家



## 『戦争が遺したもの』

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二=著  
新曜社

2800円(税別) ISBN4-7885-0887-7